

例会記事

十月例会 昭和六十三年十月二十二日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

- 一 資料紹介「盤水尺素」 吉田 厚子
- 二 『明治期における脚気の歴史』をめぐる話題 山下 政三
- 三 ビデオ鑑賞—安政四年のヒポクラテスたち—(六〇分)

十一月例会 昭和六十三年十一月二十六日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

- 一 『エピソード』諸篇に見るヒポクラテス医学派の歴史
の実像—その思想上の位置づけを含めて— 今井 正浩
- 二 ビデオ鑑賞—医跡めぐり—『帝王切開術発祥の地』
(一〇分)
- 三 池田多仲 深瀬 泰旦

十二月例会 昭和六十三年十二月十七日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

- 一 瘡守稻荷信仰と梅毒史 (蘭学資料研究会と合同で行われた)
- 二 十九世紀江戸でのエウスタキ解剖書 中西 淳朗
- 三 村尾留器の『三省録』について 菅野 陽
- 四 ビデオ鑑賞—医跡めぐり—『緒方洪庵と適塾』(二二分) 岩崎 鐵志

例会抄録

『米利堅平本常用方』について

高安伸子・酒井シヅ

ヘボン (James Curtis Hepburn) は宣教医師として安政六年に来日した。しかし一般的には神学等の業績が評価され、医師としてのヘボンについてはあまり顧みられていないと言える。その原因の一つとして、ヘボンの行った医療活動の、第一次史料不足が挙げられる。今回演者らは、岐阜県羽島の内藤記念くすり博物館所蔵の『米利堅平本常用方』の記述に、明治三年陰暦七月十二日からの横浜においての日誌が含まれていることに気付いた。『米利堅平本常用方』は文章の表記から写本であると思われるが、原本の筆者等の記載が残されていないため詳細は不明である。しかし、少なくとも日誌部分の原本の筆者はヘボン自らではなくヘボン治療所にいた門弟の誰かであろうと推測される。本史料は日誌部分と常用方部分の二部構成となっていた。今回は日誌部分のみを取り上げて、ヘボン治療所での医療活動がどのようなものであったかを分析・考察したが、今回の報告は概略の報告であることとを初めにお断りしておく。

考察の結果、ヘボンが非常に積極的に日本人に対して治療活動を行っていたことが判明した。ヘボンのみならず、シモンズ (D. B. Simmons) がこの治療所でもかなりの人数の患者を診療して

いたことが克明に記されている。従来より、ヘボンとシモンズとの交流は知られていたが、この史料の記述からはシモンズがヘボンの片腕として施療所を手伝っていたことがうかがわれる。その他、本史料には外国人医師の氏名としてヨムベン、マイルの二名が、日本人医師の氏名として貫斎、秀英という二名が記述されていた。残念ながら現段階においては、この四名についての正確な特定はできていないが、今後の調査により人物の特定ができれば、ヘボンをめぐる新たな事実が浮かぶものと思われる。

『米利堅平本常用方』の第一次史料としての信憑性という点について触れると、前述のように原本の筆者等が記載されていないために、現段階ではヘボン施療所の公式記録であると断定することは困難である。しかし仮りにヘボン施療所の記録ではないにしても明治三年当時の医療を知る貴重な史料であると考えられる。今後本史料の信憑性が他の史料によって裏付けられれば、医師としてのヘボンの姿のみならず、明治初年のアメリカ人医師の治療方法がどのようなものであったかが明確になるものと思われる。

(昭和六十三年九月例会)

池田 多伸

深瀬 泰且

我々が「池田文書」と呼んでいるものは、東京大学医学部初代総理池田謙齋の子孫にあたる、池田允彦家に保存されていた約四

千通に及ぶ文書類である。東大医学部の前身である幕府医学所関係文書、およびその関係者からの書簡、ならびに池田謙齋宛の書簡がその主なものである。これらの文書は去る昭和六十一年七月以来、我々「池田文書研究会」のメンバーによって、整理、分類の手が加えられ、まだ目録の作成までには至っていないが、ほぼ整理が完了している。

「池田文書」は、池田謙齋関係の文書類がほとんどを占めているが、謙齋の養父であり、お玉が池種痘所の設立に関わった池田多伸に関係のある文書が二、三含まれている。「池田文書」に含まれる池田多伸関係の文書は、伊東玄朴や大槻俊斎などから多伸にあてた七三通の書簡と、多伸自身の筆になる『備忘録』（文久元年より慶応元年まで）と五通の文書である。これらの文書を中心に、さらに『池田謙齋 プロイセン国ベルリン』（彩雲堂一九八四）に記載されている、ベルリン留学中の謙齋からの留守宅宛の書簡を参看して、いままでもあまり取り上げられることなかった池田多伸について報告する。

池田多伸は文政三年（一八二〇）二月十三日に、津和野藩医である池田淳作（墓碑には淳策とある）の長男として石見国に生まれた。十九歳で江戸にでて、後に伊東玄朴の門に入った。この時名を玄仲と改めたといわれている。安政五年のお玉が池種痘所の設立に際しては、江戸にすむ八三名の蘭方医の一人としてその設立資金を拠出し、発足と同時に留守居役として種痘所に起居することになった。多くの門人の中から留守居役に選ばれたのは、彼が師の玄朴の厚い信任を得ていた証拠である。